

自己認知の特殊性と「自己カテゴリー化」

—自己記述と他者記述の比較を通して—

外山みどり 藏本知子

1. 自己認知と自己カテゴリー化

人間はいかにして自己の特性や心理的傾向を知り、自己に対する安定した認知像を得るのであろうか？ また自己をどのようなものと定義し、分類し、カテゴリー化するであろうか？

社会的アイデンティティ理論 (Tajfel, H., 1982) の理論的發展である自己カテゴリー化理論 (Turner, et al., 1987) においては、人間が、自己を所属集団の一員として定位することによってアイデンティティを得、脱個人化によって個人レベルから集団レベルに移行することを通して、自己を内集団に同一化するという過程を扱っており、自己カテゴリー化をもっぱら集団内での問題として捉えている。しかし、中村 (2002) が指摘するように、このような捉え方は自己カテゴリー化の一面を表しているに過ぎない。確かに我々は、人種・民族、性別、所属集団などの外的で客観的特性の側面から自己をカテゴリー化することもあるが、内的な心理的傾向、特徴、性格などをもとに自己を定義、分類することもあり、後者は前者に比べてむしろ重要でさえある。本稿では、自己の特徴の記述を手がかりにして、この問題を検討する。厳密に言えば、自己カテゴリー化という用語は、何らかの側面に関する個々の対象の異同の認知とそれに基づく分類を含意し (中村 2002 を参照)、その範囲はやや限定的であるが、本稿ではこの用語が意味する範囲を拡大して、自己認知そのもの、または自己に関する叙述を対象にして考察を進める。

自己認知の起源についてはさまざまな可能性があり、またさまざまな論議がなされてきた。それらをまず簡単に概観しておきたい。

まず最も直観的にわかりやすいのは、自己を内観、内省することによって自己の内面を知るというプロセスであろう。我々は自分の感情の動きや思考の経過をモニターすることができると感じており、それを通じて自己の内面を知ることが

できている。本人にしか開かれていない、感情や主観的感覚に対する直接的認知ルートが存在すると信じているのである。

しかし、そのような内観に基づく自己理解は、必ずしも正しくないことが指摘されてきた。Nisbett & Wilson (1977) は、人が自分の行動の原因や理由を正しく認識できないことが多いことを指摘し、本人が語る理由は、内面の動きについての直接的な認知や記憶に基づくものではなく、往々にして一種の暗黙の因果理論に基づくと述べている。さらに Wilson (1985, 2002) は、人間の行動や心理的作用の背後には適応的無意識のメカニズムが働いており、それを意識的に探ろうとすることは困難であること、無理に理由を探そうとすることは時として間違った方向への態度変化を生じ、むしろ有害であると指摘している。

自己の内面を直接に知覚し、モニターすることが困難だとするならば、他の手がかりとしては何があるであろうか。Bem (1967, 1972) の自己知覚理論では、自分の行動を観察することこそが、自己の内的状態に対する理解の源泉であると考えられている。Bem は、スキナー流の徹底的行動主義 (radical behaviorism) の立場から、当時隆盛であった認知的不協和理論を批判し、それに代わるものとして自己知覚理論を提出したが、そこでの主張は、人は自分の内的状態を知る際にも、他者知覚の場合と同様に、外顕行動 (overt behavior) とそれが起こった状況の観察から推論するのだというものであった。つまり、自己知覚理論においても、本人だけが知りうる直接の内的ルートは限定されたものであることが前提とされており、他者からも観察可能な行動が、自己の内面を知るための重要な手がかりと考えられているのである。

自己認知の起源に関しては、「他者の目を通して自己像が形成される」という社会的な側面を重視した考え方も古くから存在する。これは象徴的相互作用論の立場に立つ人々に典型的に見られるが、Cooley (1902) の「鏡映的自己 (looking-glass self)」は、他者が自分の行動にどのように反応するかという、いわば他者という鏡に映した自己の姿を感じ取ることによって自己が成立し、その姿に対する誇りや恥が自己感情となると考えた。また Mead (1934) は、親や周囲の他者の期待を取り入れること、つまり役割取得 (role-taking) によって自己が形成されると考えている。

日常生活を省みても、自己の内面の動きや外顕行動を観察するだけで、自分がどのような人間であるかを知ることは困難である。子どもが成長する過程では、親や周囲の大人が自分をどう評価し、どう記述するかを、自己像形成の重要な手がかりとしていと考えられる。また自分がどのような性格や能力をもっているかを判断するためには、他の同じような人々と比べて自分が平均的な傾向をもつ

のか、際立った特徴をもつのかを知らなければならない。つまり他者との比較が欠かせない要素になる。いわゆる社会的比較 (Festinger, 1954) を行うことによって、自分が社交的なのか、神経質なのか、運動が苦手なのか、手先が器用なのか、等のさまざまな特性に関する判断が可能になるのである。

このように、自己認知、自己像の獲得のためには、他者の目あるいは他者との比較が重要な役割を果たすと考えられる。

2. 自己認知と他者認知の異同

自己認知は他者認知とどのような共通点があり、またどこが特殊であろうか。

最も極端な立場として、前述した自己知覚理論の提唱者である Bem (1972) は、「内的手がかりが弱く、曖昧で、解釈不可能であるような範囲では」という限定条件つきではあるものの、自己知覚が他者知覚と機能的に同等のプロセスであると主張している。つまり、自己認知の場合も他者認知と同様に、外から観察できる行動とそれが起こった状況の性質から、感情や欲求や態度などの内的状態を推論するのだと考えるのである。

しかし、直接的な内的手がかりが常に明瞭であるかどうかに関しては論議があるものの、過去の行動や経験などに関する知識については、自他で大きな差があることは明らかであるし、自己認知と他者認知がまったく同一のプロセスを経るとは考えにくい。帰属研究においては、行為者-観察者の差異 (actor-observer difference) の問題として、自他の帰属の違いが検討されてきた。多くの研究の結果では、自己の行動に関しては、その原因を周囲の環境・状況や他者の影響などの外的要因に帰することが多いのに対して、同じ行動を見聞きした他者は、行動の原因を行為者本人の性格や態度のような内的な要因に帰する傾向があることが見出されている (Nisbett & Jones, 1972; Watson, 1984)。このような自他の帰属の差異が生じる背景としては、自己の場合には外的環境が目立ちやすく、他者の行動に対しては、行為者である他者自身が目立ちやすいという知覚的顕現性の違いのほか、自己については過去の同様な事態での行動をはじめとする莫大な量の知識があるのに対して、他者に関しては過去の行動に関する知識が乏しいため、一般的な他者や観察者自身の行動傾向との比較が行われるという、知識の量と質に関する違いがあげられている。

それに関連して、自己と他者を、どの程度抽象的な特性形容詞によって叙述しやすいかという傾向についても検討されている。他者に関しては、本人の性格や内的特性に行動の原因を求める傾向が強く、従って、社交的な、まじめな、というような一般的な形容詞による記述がなされやすいのに対して、自己に対しては、

状況に応じて行動が変動し、必ずしも行動傾向が一貫していないことを知っているため、形容詞による断定的な性格記述が起こりにくいのではないかと考えられる。これを実証したのが Nisbett らの研究 (Nisbett, Caputo, Legant, & Marecek, 1973) であり、それによると、自己よりも他者、それも親しい他者よりもニュースキャスターのような直接の知人でない他者の場合の方が、形容詞によって記述されやすいことが見出されている。

3. TST および Describe yourself 法による自己記述

自己概念や自己についての知識を自然な形で測定する方法として、臨床心理学、性格心理学、発達心理学などで広く使われてきたものに、Twenty Statements Test (以下 TST と略記) がある (Kuhn & McPartland, 1954)。これは、「私は誰でしょう？」という問いに対する答を思いつくままに 20 個挙げるというものであり、この記述内容によってセルフ・イメージや自己概念を知ろうとするのである。

社会心理学においては、Cousins (1989) が日本人大学生とアメリカ人大学生に TST を実施した結果を分析して、アメリカ人の場合には、性格などのような状況を越えた一貫性をもつ心理的特性の記述が日本人に比べて多く、日本人の場合には、「～大学の学生」というような集団所属の記述が比較的多いことを示し、これを文化による自己像の差異に結びつけて論じている。この研究は、その後、Markus & Kitayama (1991) に引用され、相互独立的自己観と相互協調的自己観の違いを示す証拠として広く論じられている。

しかし、日本人大学生の TST での記述に集団所属や社会的関係などが多く出現したのは、記述の文頭が「私は…」(英語の場合は “I am” である) で始まっていることが大きく影響していると考えられる。日本人の場合、「私は誰でしょう？」という問いに対して、「私は…」で答えるとするならば、自己紹介の場合などのように、自分の身分や社会的関係などをまず述べるのが普通であり、性格特性や内面的な傾向などを述べることは多くない。また、Cousins (1984) の研究では、20 個の記述のうち、最初の方に出現するものを重要であるとする前提にたち、最初の 5 個の記述のみを分析対象としている。この方式も、日本人サンプルで集団所属や身分の記述が多いという傾向を強めていると考えられる。

このような観点から外山 (2001) は、従来の TST のほかに、「私は」という主語部分が記載されていない Describe yourself 法を実施し、後者の方が、内面的な心理的特性の記述が多く生じることを見出した。また外山 (2002) では、異なる内容の授業の後に TST および Describe yourself を実施することによって、

自己の各側面のうちで、特に調査時点で活性化されている側面に関する記述が多くなることを明らかにした。

4. 自己記述と他者記述

本研究では、これらの研究を参考に、自己記述だけでなく同じ形式で他者記述に関するデータも集め、両者の記述内容の違いを検討する。このような形の比較によって、自己認知と他者認知の異同に関する直接的な情報が得られるとはいえないが、1つの手がかりにはなるものと考えてデータを収集する。ここで対象とする「他者」は、自己との比較が可能であることと、調査対象者にとって20の記述を完成させることが容易であることを考慮して、「もっともよく知っている他者」とする。「もっとも重要な他者」について書かせるという可能性も考えられるが、今回は、困難なく20の記述を完成させることができるということを優先し、また記述内容が過度にポジティブなものになることを避けて、「もっともよく知っている他者」とした。また、前述した外山(2001, 2002)の結果から、「私は…」という主語の存在は反応をゆがめる可能性があるので、主語なしの書式による Describe yourself 法を用いることとした。

自己記述、他者記述の比較に関しては、特に以下の3点を検討する。

(1) 記述内容の分布

Cousins (1989)、および外山(2001, 2002)と同様、記述内容がどの側面に言及したものかに関する分布を、自他の記述で比較する。具体的には以下で述べるように、身体的特徴、集団所属や社会的関係、心理的特徴などに大別できる。

(2) 記述に使われた品詞の分析

本研究では、自己と他者の記述の中に現れる品詞の違いに注目する。前に述べたように、一般的な特性形容詞による記述は、自己よりも他者に関して多く出現する可能性がある。自己記述に関しては、抽象的な形容詞よりも具体的な動詞による記述が多いかもしれない。またカテゴリー化との関連で考えれば、名詞による記述にも注目すべきである。カテゴリー化とは、社交的、気が弱いなどと、単に連続体上の傾向として記述するのではなく、少数の離散的なカテゴリーのどれかに当てはめることを意味する。集団や身分などによる記述はその例に当たるが、内的心理特性に関しても名詞による記述は存在する。自己・他者いずれに関する記述で名詞が多く出現するかについては先行研究が見当たらないが、本研究ではこの点に関しても比較を行う。

(3) 記述の望ましさ

そのほか、自己記述と他者記述によって、記述の望ましさが異なるか否かも吟

味する。一般に、自己については、ポジティブな側面よりも、短所、欠点、ネガティブな側面が記述されやすいのに対して、他者については、長所やポジティブな側面が記述されやすいのではないかと予測される。この点についても分析を行う。

方 法

回答者：大学生 170 名。このうち、自己記述を 84 名（女子 59、男子 25）、他者記述を 86 名（女子 60、男子 25、不明 1）、が行った。20 個の記述を完成させられなかった回答者が、自己記述で 5 名、他者記述で 6 名いたので、これらのデータは分析から除外した。従って分析対象となったのは、自己記述が 79 名、他者記述が 80 名分のデータである。

手続き：自己記述、他者記述は、それぞれ別の授業後の時間を利用して、教室で一斉に行われた。自己記述は、Describe yourself 法によって、以下のような教示のもとで行われた。

『あなたは自分自身をどう記述しますか』という質問に対する答えを以下に 20 個挙げて下さい。頭に浮かんだ順番に記入して下さい。論理的であるとか、一貫しているとかいうことを気にせず、あまり考え込まずに回答して下さい。』用紙には 1～20 の数字と下線のみが引かれている。

他者記述に関しても自己記述と同一の方式を用いたが、まず「もっともよく知っている他人」を思い描いてもらい、その人について記述を求めた。教示は、上述の自己記述に対する教示の『あなたは自分自身を...』という部分が『あなたはその人をどう記述しますか』に代わるだけで、あとはすべて同じであった。用紙の様式も同一である。

結果と考察

1. 他者記述の対象として選ばれた人物

他者記述では、「もっともよく知っている他人」を思い描いてもらい、その人についての記述を求めた。選択された人物は、友人（親友・同性の友人・異性の友人等の表記も含む）が最も多く 37 名、以下、恋人（15 名）、きょうだい（12 名）、母（9 名）の順であった。

Table 1 自己—他者記述のカテゴリ分布

	自己記述 (%)	他者記述 (%)
A 身体的特徴	0.7	0.6
A' 性別	0.3	0.0
B 社会的特徴・集団所属	1.5	2.1
B' 人間関係	0.2	1.6
C1 好み・関心	8.7	11.7
C2 願望・欲求	0.9	0.4
C3 活動・習慣	1.3	4.1
C4 条件付きの心理的特徴・傾向	2.8	3.4
C5 条件なしの純粹心理特性・傾向	67.2	51.2
C6 能力	1.2	3.9
C7 継続的心理状態	0.6	0.3
C8 自己認識・価値観・態度・生き方	7.6	3.7
E1 修飾付きの身体的特徴	3.8	8.0
E2 修飾付きの社会的特徴	0.2	0.5
E3 他者からの評価	0.8	1.8
E5 現在の状態・状況	0.4	0.3
E6 過去の行動(些細な)	0.0	0.4
E8 所有	0.1	0.4
F1 自分に対する態度など(他者のみ)	0.0	2.7
F2 自分との比較・類似(他者のみ)	0.0	1.0

2. 自己記述と他者記述の比較

(1) 記述内容の分布

記述内容が、身体的特徴、集団所属や社会的属性、心理的特性などのうち、どの分野に多く分布しているかの違いをまず検討した。記述の分類にあたっては、外山(2001)同様、Cousins(1989)のコーディング・スキームを一部修正したものをを用い、2名の大学院生が独立にコーディングを行った。2名の判定の一致率は、自己記述で81.1%、他者記述では78.2%であった。判定が食い違った場合には、第3の判定者(第2著者)がそのどちらかに決定した。

自己・他者記述の全体的分布をTable 1.に示す(頻度0のカテゴリーは省略)が、全体として、心理的特性・心理の状態に関する記述、特に条件なしの純粹心理特性に関する記述が多く、自己記述の67%、他者記述の51%を占めている。他方、社会的特徴・集団所属に関する記述は極めて少ない。純粹心理特性以外で記述数が多いのは、好み・関心、修飾付き身体的特徴(例、少し太りぎみ)などである。

Table 2. 主なカテゴリーの平均記述数 () 内標準偏差

	自己記述	他者記述	t
C1. 好み・関心	1.50 (2.19)	2.38 (2.01)	1.50
C5. 纯粹心理特性	13.01 (4.38)	9.73 (4.20)	4.83***
C8. 自己認識など	1.53 (1.84)	0.85 (1.27)	2.72**
E1. 修飾つき身体特徴	0.72 (1.41)	1.59 (1.56)	3.66***

p<.01 *p<.001

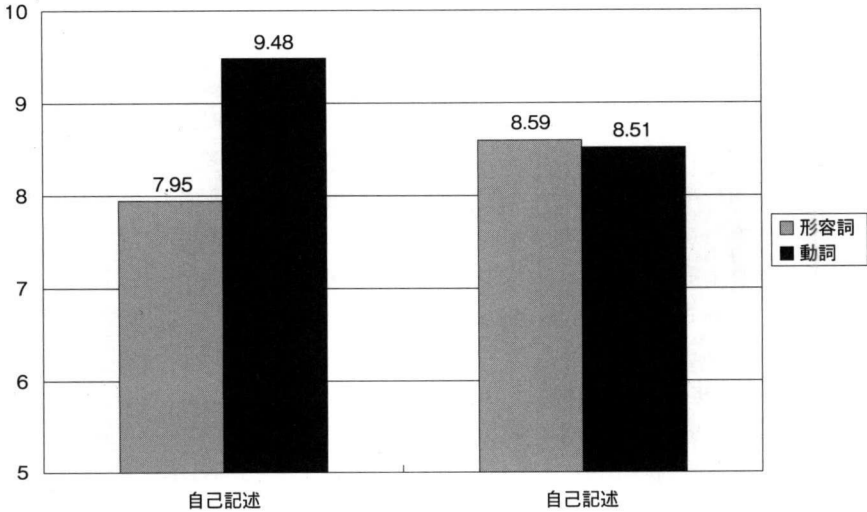


Fig. 1 形容詞と動詞の使用頻度

自己記述と他者記述を比較すると、自己記述は纯粹心理特性に反応が集中しているのに対して、他者記述はそれより広い範囲に分布している。主なカテゴリーについて、1人あたりの記述数を比較すると Table 2 の通りであり、C5. の纯粹心理特性と C8. 自己認識・価値観等については自己記述の方が多く、E1. 修飾つき身体特徴については他者記述の方が多かった。C1. 好み・関心については有意差が見られなかった。つまり、比較的安定した心理的特徴や傾向については、自己の場合の方がより多く記述されることが明らかになった。

(2) 品詞の使用頻度

自己・他者記述の中で用いられる品詞の頻度に違いがあるかどうかを確かめるため、テキストマイニング・ソフト True Teller (野村総合研究所) を用いて分析を行った。この分析の主な目的は、他者記述では抽象的な特性形容詞が多く用いられ、自己記述では動詞形で表現されることが多いというような違いがあるか

Table 3 記述の望ましさによる分類—平均記述数

()内 標準偏差

	自己記述	他者記述	t
ポジティブ	5.22 (2.95)	10.54 (4.35)	9.044***
ニュートラル	5.67 (3.32)	2.98 (3.29)	5.142***
ネガティブ	9.11 (4.05)	6.49 (3.77)	4.237***

*** $p < .001$

否かを確かめることであった。自己記述、他者記述それぞれにおける形容詞と動詞の出現頻度(20記述中)の平均をFig. 1に示す。記述対象を被験者間要因、品詞の種類を被験者内要因とする分散分析を行うと、記述対象×品詞の交互作用が有意傾向となった($F(1, 157) = 2.931, p < .089$)。自己記述、他者記述それぞれを分析すると、自己記述については、形容詞よりも動詞を多く使用する傾向が見られたが($t(78) = 2.06, p < .05$)、他者記述に関しては、両者の使用頻度に有意差は見られなかった($t(79) = 0.13, n.s.$)。つまり、自己記述においては、抽象的な形容詞による表現よりも具体的な動詞による表現が多いことが見出されたが、他者記述については、形容詞による表現と動詞による表現はほぼ同程度であった。

自己カテゴリー化との関連から、名詞についても2種類の記述の比較を試みたが、20記述全体での平均は自己記述で24.89個($SD = 7.27$)、他者記述では26.30個($SD = 9.83$)で、両者に有意差は見られなかった。

このように、品詞の使用に関する比較では、他者記述では形容詞と動詞を同程度用いるのに対して、自己記述では形容詞よりも動詞が多く出現する傾向が見られた。名詞の使用頻度に関しては、自他の記述で差が見られなかった。ただし本研究で用いた品詞分析では、品詞の出現頻度がわかるだけで、それが自己または他者自身を記述した語であるか否かは明確でない。今後、この点をさらに吟味する必要がある。

(3) 記述の望ましさ

各記述の望ましさに関しては、2名の判定者により、ポジティブ、ニュートラル、ネガティブの3種類に分類した。結果はTable 3の通りであり、ポジティブな内容は他者記述の方に多く、ニュートラルおよびネガティブな内容については、自己記述の方が多かった。自己記述では20個の半数に近い平均約9個がネガティブな内容であるのに対して、他者記述では、半数を少し越える数の記述がポジティブであった。3種の記述を個別に分析すると、自己-他者記述の差はすべて0.1%水準で有意であり、全般的に、他者記述の方が自己記述よりも、望ましい傾向や特性に言及することが多いことが明らかになった。

本研究の結果は以下の3点に要約される。第1に、自己に関しては純粹心理特性を中心とした内面の記述が圧倒的多数を占めるが、他者に関しては比較的多様な側面の記述が現れること、第2に、他者記述は自己記述よりもポジティブであること、第3点として、品詞の使用に関しては、自己記述で形容詞よりも動詞を多く使う傾向が見られたが、名詞の使用頻度は自己記述と他者記述で差が見られなかったこと、である。

第1の点について考えると、内面的な心理的傾向、特にその時どきの感情や迷い、悩みなどに関する知識は、当然ながら他者よりも自己に関して豊富であり、それに対して他者については、外見や社会的属性、心理的特徴の中でも外から容易に窺えるような好みや行動傾向などに記述が分散することは十分理解できる。Table 1の分類では、純粹心理特性・傾向に分類されたものの中はかなり多様な表現が含まれているため、純粹心理特性が他者記述よりも自己記述で多かったという結果は、必ずしも自己に対して抽象的な特性語による断定的な特徴づけが行われているということを示すものではない。品詞の分析において、自己記述には形容詞よりも動詞が多く使われる傾向が見出されたこととも考え合わせると、自己に対する記述には、他者の場合よりも具体的な行動に基づいた表現が多いのではないかと推察される。

他者記述が自己記述よりもポジティブであるという傾向は、事前の予想通りのものであったが、これに対してはいくつかの解釈が考えられる。1つには、自己については長所を誇示せず、むしろ欠点や不十分な部分を表明するという謙遜を重んじる文化的規範が内面化されたものとも考えられるし、自己のネガティブな側面に注意が集中している結果が自己記述に現れたものとも考えられる。自己のネガティブな側面に対する意識の強さは、特に今回の回答者のような青年期の時期に顕著であろう。この傾向は必ずしも自己評価の低さにつながるわけではなく、自己反省と自己改善に資するものかもしれない。なお、他者記述においても、家族などの親しい他者に関しては、ネガティブな記述が多く見られた。当該他者との間柄、親密度と記述の望ましさの関係については更なる分析が必要である。

前にも述べたように、本研究では自己記述と他者記述の表現面での差異を検討したにとどまるが、今後、これを手がかりにして、記述のレベルだけでなく認知内容およびプロセスに関しても、自己認知と他者認知の異同について考察を進めていきたい。

引用文献

Bem, D. J. (1967). Self-perception: An alternative interpretation of cognitive disso-

- nance phenomena. *Psychological Review*, **74**, 183-200.
- Bem, D. J. (1972). Self-perception theory. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 6., New York: Academic Press.
- Cooley, C. H. (1902). *Human nature and social order*. New York: Scribner's.
- Cousins, S. D. (1989). Culture and self perception in Japan and United States. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 124-131.
- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison processes. *Human Relations*, **7**, 117-14.
- Jones, E. E. & Nisbett, R. E. (1972). The actor and the observer: Divergent perceptions of the causes of behavior. In E. E. Jones, D. E. Kanouse, H. H. Kelley, R. E. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner (Eds.), *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. Morristown, NJ, General Learning Press.
- Kuhn, M. H. & McPartland, T. S. (1954). An empirical investigation of self-attitudes. *American Sociological Review*, **19**, 68-76.
- Mead, G. H. (1934). *Mind, self, and society*. Chicago, University of Chicago Press.
- Nisbett, R. E., Caputo, C., Legant, P., & Marecek, J. (1973). Behavior as seen by the actor and as seen by the observer. *Journal of Personality and Social Psychology*, **27**, 154-164.
- Nisbett, R. E. & Wilson, T. D. (1977). Telling more than we can know: Verbal reports on mental processes. *Psychological Review*, **84**, 231-259.
- Tajfel, H. (1982). *Social identity and intergroup relations*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Turner, J. C., Hogg, M. A., Oakes, P. J., Reicher, S. D., & Wetherell, M. (1987). *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford: Blackwell.
- 外山みどり (2001). 自己記述を規定する条件 日本社会心理学会 42回大会発表論文集, 512-513.
- 外山みどり (2002). 自己記述に影響を与える要因—TSTと“Describe yourself”法を用いて— 日本社会心理学会第43回大会発表論文集, 708-709.
- 中村陽吉 (2002). 対面場面の心理的過程—分類学的観点からの接近—ブレーン出版
- Watson, D. (1982). The actor and the observer: How are their perceptions of causality divergent? *Psychological Bulletin*, **92**, 682-700.
- Wilson, T. D. (1985). Strangers to ourselves: The origin and accuracy of beliefs about one's own mental states. In J. H. Harvey & G. Weary (Eds.), *Attribution: Basic issues and applications*, Orlando, Fla.: Academic Press.
- Wilson, T. D. (2002). *Strangers to ourselves: Discovering the adaptive unconscious*. Cambridge, MA., The Belknap Press of Harvard University Press.

**本研究の一部は、日本社会心理学会第47回(2006)において発表された。